——— 2001. Татарская философская мысль конца XVIII – XIX вв. Казань: Татарское книжное изд-во.

（磯貝　真澄　京都外国語大学外国語学部非常勤講師）

Mansoor Jassem Alshamsi. 2011. *Islam and Political Reform in Saudi Arabia: The quest for political change and reform*. USA and Canada: Routledge, viii+296 pp.

サウディアラビアが聖地マッカとマディーナを擁するイスラーム世界の盟主であり、厳格なワッハーブ派の本拠地であることはよく知られている。しかしながら、その社会がどのような意味でイスラーム的なのか、ということはあまり明らかにされてこなかった。サウディアラビア社会におけるイスラーム思想や宗教界内部の動きについての研究は厚みのあるものとはいえず、特に 9.11 以降はこのような状況に対する反省が求められ、具体的かつ現実的にその社会・文化・思想を理解することがよりいっそう必要となった。本書は、1990 年代始めに国王宛にだされた建白書に大きな影響を与えた宗教界若手ウラマー 3 人を詳細に分析したものであり、これらのニーズに応えうる非常に有益な文献のひとつとなっている。

サウディアラビアは 1932 年に独立し、サウド家による王朝支配でありながらもうまく近代化を成功させてきた一方、その過程ではさまざまな政治的異論が国内で出されてきた。大きな事件としては、1960 年頃にナセル主義の影響を受けたタラール王子らによる「自由プリンス事件」と呼ばれる動きがあり、また 1979 年のジュハイマン・ウタイビーらによる聖地マッカのカアバ聖殿占拠事件がある。1990 年 11 月には、リベラル派 43 名による建白書（10 項目）、1991 年 5 月には保守派 472 名による第 2 の建白書（*Kitab Shawal*「シャウワール月の書」、12 項目）、1992 年 8 月には保守派 107 名による第 3 の建白書（*Mudhakkirat al-Nasihah*「助言覚書」、10 項目）が国王宛にだされている。この第 2、第 3 の建白書は、宗教界保守派からのイスラーム法の厳格な適用を求める政治改革の要求であり、サウディアラビア政府とその国内に大きな衝撃を与えた。さらに最近では、2003 から 2004 年にかけて、立憲君主制を求める建白書とシーア派やリベラル派知識人からの建白書が当時のアブドゥッラー皇太子宛に提出されている。本書では、第 2、第 3 の建白書の思想的指導者となった 3 人の新世代ウラマー、サファル・ハワーリー、サルマーン・アウダそしてナースィル・オマル（以降、まとめて指導者達と呼ぶ）の論考と行動、業績が詳細に分析されている。スンナ派イスラーム改革グループの学者であるこの指導者達が、調和を維持しながらの平和的改革によりサウディアラビアに変化をもたらそうとする政治的力となってきたこと、そしてこの平和的改革アプローチは、紛争を公的な同意を得て調整・解決させ政治体制に組み込んでいくという、イスラーム政治の手法により理論づけられていることが本書では詳しく紹介されている。

著者の目的は、指導者達の政治的変化と改革に関する概念を検討し、パラダイムを変えていくための主要方針を理解することにある。1980 年代に彼らがどのような意見を表明したのか、それがサウディアラビア国内に与えた影響は何か、どのように建白書の提出という事件につながっていったか、そして指導者達は 1994 ～ 1999 年に政府により投獄されるが、投獄中と釈放後どのように指導者達と国内外の動きが変化していったかが、深く論考されている。事件そのものは、多くの書籍やニュースで報告されているものであるが、その背景となる思想にまで踏み込んだものはあまりなく、非常に貴重な文献である。

著者のマンスール・シャムスィーは、1965年生まれのUAE出身の政治学者で、2004年に英国エクセター大学で政治学の博士号を取得、そしてその博士論文をもとに、2006年中頃までを追記する形で本書が出版されている。著者は、1990年のイラクのクウェート侵攻以前から、卓越した新世代の学者としてハワーリーの名前を聞いており、侵攻時には指導者達の講義録音テープが湾岸諸国に出回りだしたと述べている。また著者自身が、侵攻後「砂漠の嵐」作戦が始まるまでの間にサウディアラビアを訪れ、多くの若者が指導者達の講義に感銘を受けている様子を観察している。本書を執筆するにあたっては、この講義録音テープ、指導者達の修士および博士論文を含む学術論文、本件に関するさまざまな図書、文書、そして指導者達のウェッブサイトからの情報などが資料として用いられている。

まず、本書で取り上げられている3人の学者について簡単に紹介しておこう。サファル・ハワーリーは1952年生まれ、宗教学校を終えたあと、マディーナ・イスラーム大学を卒業、マッカのウンム・クラー大学で1981年に修士号、1985年に博士号を得ている。その後この大学の教授となり、イスラーム信条箇条学科の学科長となっている。サルマーン・アウダは1955年生まれであるが、彼もまた宗教学校で学び、大学でアラビア語を2年間、シャリーアを2年間学んだあと、宗教学校で4年間の教職についている。その後、イマーム・ムハンマド・イブン・サウード・イスラーム大学カシーム校のスンナ学科において1988年に修士号を、2004年に博士号を得ている。ナースィル・オマルは1952年に生まれ、1970年に宗教学校を終えたあと、シャリーア学部を卒業（1974年）、イマーム・ムハンマド・イブン・サウード・イスラーム大学で1979年に修士号、1984年に博士号を取得、その後、宗教学部の教授となっている。

本書は13章からなっている。1章では、導入部として全体的な背景と指導者達の経歴や業績等の紹介がなされ、彼らの運動をスンナ派イスラーム法に基づいた政治的変化と改革の運動と定義している。また、さまざまなイスラーム運動やサウディアラビア政治における指導者達の位置づけと関係が簡潔にまとめられ、この改革運動はサウディアラビアの基本法、イスラーム法、そしてその政治的な危機に焦点を当てずには理解できない、と述べている。著者の問いは、(1) 指導者達がもつ政治思想と将来構想の基礎は何か、(2) 指導者達は政治的変化と改革という問題をどのように見ているか、そして (3) 指導者達は既存の政治体制と自分自身の関係をどのように見ているか、という3点である。さらに著者は、「指導者達の戦略と行動は防衛（ムダーファア）という概念に基づいている」という仮説を提案している。これは、説得と論戦相手の説を無効にすることにより人々に自らの主張を確信させることを意味するが、具体的には政治的変化と改革に向けた市民－行政間の闘いのための方法論であり、「対立」と「宥和」という2つの軸をもつものとしている。

2章では、現代のサウディアラビアが直面する7つの不安定要因（3項目がアメリカ、他はイラン、イラク、湾岸諸国連合、国内の過激派に関係する）をまず紹介している。これらの不安定要因に対し、政府はアラブとイスラームのアイデンティティを強く打ち出すことで対抗する方針を示し、そのために国内のイスラーム共同体や運動（これに指導者達の改革運動も含まれる）との連携を実施している、と述べている。次に、国内の政治的プレイヤーとして、王室、内閣、諮問委員会、最高宗教委員会の4つをあげ、その行動分析を行っている。さらに、先行研究を参照しながらサウディアラビアの実態を、イスラームの役割、福祉国家、近代化プロセス、改革派と学者の役割、ウラマーの役割、政治的イスラームなどの観点から整理し、それらと指導者達とのかかわりを検討している。

3章と4章では、スンナ派の法学に関する指導者達の見方を検討し、その本質・目的・起源の理

解と、改革者の政治行動をこれに基づいて明確にすることを目指している。ここで重要となるキーワードが、「シャリーア的統治の法学」であり、ハワーリーはこの概念を用いて宗教としてのイスラームが政治的問題に関与する正当性を強調し、アウダは政治的変化と改革の手法として、この法学を明確にした、と述べている。著者は、この法学こそが彼らのアイデアを形作った本質であり、平和的イスラーム市民による政治行動の法的根拠、そして改革に向けての活動内容を提供する基盤となっていると主張する。次いで、イスラーム法の目的、イスラーム法の法的権利、バランスと優先度の法理論といったイスラーム法の諸概念が検討されている。政治的変化と改革を目指して合法的に行動するためには、イスラーム法上の多くの言葉を必要とするが、シャリーア的統治の法学により、スンナ派イスラーム法原理の基本を損なうことなく、この種の言葉が活用できるようになり、そしてまた、これにより指導者達は、改革運動時に直面する政治的リスクのレベルを調節することができるようになった、と述べている。

5章では、指導者達とさまざまなスンナ派イスラーム思想家、ウラマー、学者との比較検討がなされている。ここでとりあげられているのは、イブン・ハンバル、イブン・タイミーヤ、指導者達の出身地であるナジド地方のウラマー達である。また、サウディアラビアの大ムフティであったビン・バーズとの交流も紹介されている。1990年代には、サウディアラビア政府は指導者達に圧力を加えるが、ビン・バーズは彼らの正統性を認識して暗黙の支持と支援を与え、政府とは少し異なるポジションをとった、という見解を示している。

6章では、1980年代における指導者達の理論形成についてレビューしている。ここで形成されたものが防衛の思想であり、これは世俗主義への対抗、延期論、方法論、海外との政治的関わり、の4つの要素から構成される。ハワーリーは修士論文で世俗主義をとりあげ、これがイスラーム的価値への脅威であること、そして民主主義が世俗主義への入り口として使われうるとして、これに大きな関心を持ち続けている。さらに博士論文では、彼は延期論を考究している。一部のムスリムは、イスラーム法で示されている要求や義務を実行しなくとも、イスラームの信仰は維持できるのではないかという期待をもっているが、この考えでは人々がイスラーム的義務の履行を延期したり無視したりできることになる。指導者達はこれに反対し、行動と信仰を結びつける必要性、つまり行動を伴わない信仰は正当ではないという考えを示し、これが政治改革運動の基本になったと著者は述べている。また、宗教指導者は一般大衆とのかかわりにおいて、孤立するのか関与するのかというジレンマに直面するものであるが、指導者達はどちらをとるかはその時の状況に依存するとし、「対立」時には孤立よりも関与していく方が成功によりつながりやすいと考えた、と分析している。

7～9章においては、指導者達とその影響を受けた改革者の行動を詳細に調べ、まとめている。7章では著者も聴いたカセットテープによる講義を中心に扱っているが、そこでは、1990年のイラクによるクウェート侵攻、そしてそれに伴う米軍のサウディアラビア駐留が大きなテーマとなっている。8章では、2つの建白書、そして6人の宗教指導者や学者により設立された法的権利擁護委員会（CDLR）の活動について紹介している。これ以降、指導者達と政府の間の緊張は高まっていき、1994年9月と10月に指導者達は逮捕拘禁される。釈放される1999年6月までの5年間を調査分析しているのが9章である。なお、著者は、収監中も指導者達は宗教界からの支援、承認を得ていたと報告している。

10章では、1999年6月の釈放後の指導者達の「宥和」的で穏健な行動方針について述べている。この戦略は「防衛」論の第2の軸であり、それ以前の「対立」方針からどのように方針を変えて

いったかが分析されている。この頃から指導者達は、政治的発言や行動よりも思想的哲学的な影響力を行使することを重視するようになり、テレビを通じた説話やインターネットのウェッブサイトで、政府よりも一般大衆にむけて主張を幅広く伝えるようになったと紹介している。なお、公的に罪科を問われず、解放のための条件もつけられず、彼らの政治的主張を維持できたまま釈放されたことは、大きな成果であった、というのが著者の見解である。

11 章で論じられているのは、釈放後の国外に向けての対応である。指導者達は、サウディアラビア政府に対するよりも、米国とイスラエルの方針に対して反対の姿勢を明示的に示すようになった。これは、シャリーアで述べられている「小さな悪よりも大きな悪に立ち向かう」という方針に沿ったもので、9.11 や米軍のイラク侵攻について、ハワーリーは当時のブッシュ大統領や米国議会に手紙を送っている。外には「対立」、内には「宥和」という「防衛」論の 2 軸の手法をうまく活用したのが、この時期の指導者達の行動であるという。

12 章では、2003 年中頃から 2006 年半ばにかけての指導者達の方針、行動をまとめている。ここで対象となっているものは、指導内容の変化、王国、国際関係、イスラーム、暴力とジハードなどの問題である。これら内外の諸問題に対して、指導者達は「宥和」的な方針を維持し、現実に即した現代イスラーム政治のあるべき姿を形成していこうとしており、その活動が詳しく紹介されている。そして最終章 13 章で、全体のまとめを行っている。

全体を通して、著者の指導者達に対する見方は好意的である。宗教的観点からの改革思想と行動の説明は十分に行われているものの、著者の仮説である「防衛」論の方針は、80 年代の理論形成の時点から確立されていたとは必ずしも言えないように思える。体制とのさまざまなやりとりの中で、紆余曲折的に「対立」から「宥和」へと移っていったという見方もでき、歴史的な展開として考えた方が説得性が高いのではないだろうか。。

サウジディアラビアは石油資源の発見と輸出により、英国の援助でかろうじて財政を維持していた貧しい国から西洋レベルの社会基盤の整った近代国家へと、この 60 年間で大きな発展をとげた。その発展プロセスにおいては、伝統社会の近代化にともない、さまざまな課題や矛盾、相克にであっている。最近では、評者の関心でもあるサウディアラビア国内のエネルギー問題も、大きな課題として浮上してきている。このような問題を研究分析するにあたって、社会変容とそれへの対応の実例を詳しく知ることは、分野を問わず非常に参考になる。本書により、ワッハーブ派本拠地の宗教界といえども一枚岩ではなく、多様な意見、動きがあることがわかり、そしてこれを通じてサウディアラビアのイスラームも変わりつつあることが理解でる。サウディアラビア社会で機能しているイスラームをより現実的かつ詳細に理解する一助となり、その社会を一層深く多面的に捉えることを可能ならしめるものとなっており、サウディアラビアにおける近代化や発展とは何か考える際に示唆に富む一冊であると言えよう。

（萩原　淳　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Gabriele Marranci. 2008. *The Anthropology of Islam*. New York: Berg, ix+182pp.

Gabriele Marranci は、1973 年イタリア生まれの人類学者で、現在はシンガポール国立大学の客員上級研究員と、イギリスのイスラーム研究センターの名誉研究員の職に就いている。自身のウェ